

今日はいいい日

杉井 祐子

「ただいまあ」

兄ちゃんが帰ってきた。

「お帰りい」

妹のさやかにミルクをあげていたお母さんが、手を止めてそれに答えた。お母さんはホツとしたような顔をしている。

いつだったかお母さんは、「たつきとゆうきの『ただいまあ』の声を聞いただけで、二人にとって、今日はいいい日だったかどうか、だいたいわかるのよ」と言っていたことがあった。お母さんが安心していうことは、兄ちゃんの今日はいいい日だったと、見当をつけたことになる。

「ああ、お腹減ったあ。なんかある？」

たしかに、ランドセルを下ろしたとたん、冷蔵庫のとびらを開ける兄ちゃんは、元気そのものである。

「プリンあるよ」

「もしかして手作り？」

「味は保証しないけどね」

「なんか産休バンザイだね。お母さんの手作りプリンが食べられるんだもん。ゆうきはもう食べたの？」

「ううん、まだ」

冷蔵庫に、お母さんお手製のプリンが入っていたことは知っていた。でもぼくは、兄ちゃんが帰るまで、食べる気になれなかったのだ。

さやかにミルクを飲ませたお母さんは、今度は紙オムツをかえ出した。兄ちゃんがさつきから、ぼくらと目を合わせようとしないことに、お母さんはきつと気がついていない。「ほら、ゆうきも食べな」

兄ちゃんはまずぼくに、プリンが入ったプラスチックの容器をわたしてきた。自分よりまず弟、兄ちゃんはこういうところ、本当にやさしい。だからなめられちゃうのだ。

それは、今日の昼休みの時間のことだった。その時ぼくは、校庭で友だちとドッチボールをしていた。外野にいたぼくは、味方の内野から飛んできたボールを受けそこねた。いきおいの止まらないボールは、坂を下るように転がっていった。

「ゆうき、何やってんだよ！」

「悪い、ちよつと待ってて！」

昼休みはすぐに終わってしまった。早くボールをつかまえないといけない。あせればあせるほど、足がもつれそうになる。止まらないボールは、とうとう校舎裏まで行ってしまった。プラタナスの木の下で、あきらめたようにやっと止まった。身がかがめ、ボールをつかもうとした瞬間、近くから声が聞こえてきた。

「弱虫のヘタレめ」

「何やらせても、ドンくさいしさ」

「このガリガリのドチビ野郎が」

最後の『ガリガリのドチビ野郎』のあたり

で、ぼくはいやな予感がした。

小四の兄ちゃんは、小二のぼくと、ほとんど背たけが変わらない。へたすると、体重的なんかは、ぼくの方が重くなっているぐらいだ。おかげでぼくは、洋服もくつも、兄ちゃんのお下がりという物を身に着けたことがなかった。

ボールを手にしたぼくは、顔を上げた。そうじ道具が保管されている倉庫の前で、三人の男子が、一人の男子を取りかこんでいた。その真ん中にいる一人と目が合った。

やはり兄ちゃんだった。

ぼくに気づいた兄ちゃんは、あごを少しだけ上げ、「あっちに行け」と言わんばかりに、目くばせをしてきた。三人の男子は、兄ちゃんと同級生とは思えないくらい、みな体格がよく、背が高かった。それだけでもうじゆうぶん、はくりよく満点である。とても近づけない。竹ぼうきを手にした三人は、その先で兄ちゃんの頭をはたき、柄で腹や足をつつき

出した。

「だれか助けて！」

声を出せない兄ちゃんのかわりに、ぼくがそうさけばいい。そう思っているのに、勇気が出ない。ぼくはそろそろと後ずさりをした。ボールを落とさないようにしっかり胸にかかえ、その場から逃げ出した。

今思えば、その後に、先生を呼んで来ればよかったのだ。校庭にもどったぼくは、そしてぬ顔でドッチボールを続けた。外野からボールをガンガンなげ、敵の中でこれかと思う相手をねらい打ちした。ぼくはすぐに内野にもどれたが、気分はスッキリしないままだった。

「兄ちゃん、今日は、ごめん」

やっこのことでぼくがそう言うと、兄ちゃん首を横にかしげた。

「何、何のこと？」

「昼休み、校舎裏で」

「ああ、あれか。何でゆうきがあやまる？」

「だつてさ・・・」

あの時、ぼくに勇気さえあれば、兄ちゃんを救えたはずだ。そう言いたいけど、自分の弱さをみとめるようで、なかなか言葉が出てこない。

「あのさ、ゆうき、お母さん、ただでさえ今、さやかのお世話で大変だからさ」

お母さんによけいな心配をかけたくないから、ぼくが校舎裏で見たことを、なかったことにしろってことなのか。

ホントにそれでいいの、兄ちゃん？

「ほれ、ゆうきも食べてみな、おいしいぞ」  
兄ちゃんはおぼくの口をふうじるように、プリンをのせたスプーンをつつこんできました。

玄関に、大きめのスニーカーが、合わせて三足ずつならんでいる。

「たつきの友だちが来るなんて、めずらしいよね」

そう言うお母さんこそ、やけにはしゃいで

いる。トレイにオレンジジュースと手作りクッキーをのせ、さっきからどのタイミングで出そうかと迷っていた。兄ちゃんは、遊びに来た三人と、自分の部屋で、ゲームをやっているはずだ。

ぼくは気が気じゃなかった。遊びに来た三人は、校舎裏で兄ちゃんを取りかこんでいた連中だったのだ。

「三人とも、あいさつがしつかりできて、お行儀のいい子ばかりよね。はいてきたくつまでしつかりそろえるから、お母さん、感心しちゃった」

なんだかイヤな感じだ。お母さんがすつかり丸めこまれている。そんな見せかけのお行儀のよさにだまされちゃダメだ。そう声に出したい。でも兄ちゃんは、お母さんに心配をかけることをおそれている。まったくめんどうくさい。これでは弟としては、ほっておけないではないか。

「それ、ぼくが持つてくから」

ぼくはお母さんの手から、トレイをうばった。今度こそ兄ちゃんを助ける。いざとなったら、三人の頭の上から、このオレンジジュースをぶっかけてやる。へらぐちをたたいたら、手作りクッキーを口にぶちこんでやるつもりだ。

それぐらいの戦闘モードで部屋に行った方がいいが、三人は兄ちゃんのゲーム機をわがもの顔で使っていた。その兄ちゃんはというと、三人からはなれた所で、壁にもたれかかって本を読んでいた。

「ありがとうごさいまーす」

三人は目をゲーム機の画面に向けたまま、手だけをトレイにのぼしてきた。これでは兄ちゃんと遊びに来たというより、ゲームをやりに来ただけだ。

「うふおん」

ぼくはわざとらしくせきばらいをした。すると、三人がやつと顔を上げた。

「なあんだ、弟かよ」

三人は正座しようとしていた足を、また前になげ出した。ぼくの予想どおり、みな親や先生の前では、すぐに優等生に変身できるタイルのようだ。

兄ちゃんはトレイに目もくれない。まるで自分だけ別世界にいるような顔をして、本から目をはなそうとしない。それはついこの間、兄ちゃんが図書館から借りてきたばかりの本である。本当は内容なんて、頭に入っていないのではないか。

なぜ仲も良くないこの三人を、家にまねいたのだろう。ぼくには、兄ちゃんの考えていることがいまいちわからない。たぶん、無理やり遊ぶ約束をさせられて、家に強引におしかけられたのだ。その唯一の抵抗が、ゲームの輪に入らず、一人で本を読むことなのだろう。

ぼくはふと、この間、担任の水田先生が話してくれた話を思い出していた。

「京都では、帰って欲しいお客が来ると、見

えないような場所に、ほうきを逆さまに立てかけるという風習があるのよ」

態度に出すとあからさますぎるし、ましてや言葉にすると失礼になる。だから人知れず、ほうきをさかさまに立てるのだという。

ほうきといえば、この間、兄ちゃんがそれでつつかれていたことを思い出す。今日は何でやられるのだろう。うちにはほうきなんてない。あったとしても、そんなことで、この三人が引き下がるとはどうてい思えない。

「兄ちゃん、お母さんが、買い物に行つて来て欲しいって」

気がついたら、ぼくはそう言っていた。兄ちゃんは一瞬、キョトンとした顔をしたが、すぐにぼくの言いたいことがわかったようだ。

それなのに三人に何も言おうとしない。もう本当にじれったい。

「そういうわけなんで、そろそろ帰ってもらえますか？」

ぼくがかわりにダメ押ししたが、三人は未

練がましくゲームをやり続けた。

「後ちよつとで終るからさあ」

「今いいとこなんだよ」

「こつからがおもしろいとこなのに」

三人はゲーム機を置いてもなお、オレンジジュースを飲み、手作りクッキーまで食べ出した。

「しようがねえなあ。今日のところは帰ってやるか」

一人がそう言うのと、しぶしぶという感じでやつと三人は腰を上げた。

今日はドッチボール大会の日である。

ぼくが昼休みのたびに、友達とドッチボールをしていたのはこのためだった。勝敗がハッキリわかるせいか、正直言って、運動会よりも盛り上がると言われている行事だった。

ただ、父兄などの観客はいない。校庭に白く引かれたコートの中にいるのは、ぼくら生徒だけである。審判役の先生は、何試合も見

なくてはいけないので、いそがしそうに校庭内を走りまわっていた。

試合は学年ごとに男女にわかれ、クラス別で戦うことになっていた。ぼくのクラス、二年三組男子チームは、毎日の練習の成果もあったのか、とんとんびょうしに決勝戦まで勝ち進んだ。

その決勝戦でぼくは、かなりの確率で敵にボールを命中させた。試合が終わった後に、水田先生から、「三組が大差で勝つことができたのは、ゆうき君の確実なキャッチと投げわざのおかげね」と、感心されるほどの活躍ぶりだった。

あつという間に全試合を勝ちぬいたぼくらは、女子チームの試合を応援しに行くことになった。

「女子の試合なんてかったるいから、六年生の試合を見に行かね？」

そう耳打ちしてきた友だちに、ぼくもささやき返した。

「ごめん、オレ、トイレに行ってから見に行くよ。だから先に行つてて」

友だちは素直にうなずき、校庭を横切つて行つた。

本当は、六年生の試合なんてどうでもよかった。自分の試合が終わってから、ぼくがずっと気になっていたのは、四年二組男子チーム、兄ちゃんのいるクラスの勝敗だった。

ぼくは小学校に入学するまで、ドッジボールなんてやったことがなかった。保育園では園庭がせまかったので、ボール遊びは禁止されていたのだ。だから一年生だった去年は、何もかもが初めてのことばかりだった。

練習をする前に、当時の担任の先生が黒板に、ルールを書いてくれた。内野とか、外野とか、聞きなれない言葉ばかりで、ずいぶんとまどつたものだ。おぼえなくてはいけないうことだらけで、ぼくは頭がパンクしそうになった。必死になつて、ルールをノートに書きとめるぼくに、友だちがふしぎそうにたずね

てきた。

「ゆうきって、兄ちゃんいるんだろ。ドッチボールぐらい、いっしょにやったことあるんじゃないね？」

なかった。ぼくら兄弟は、家でボールをなげ合うことすらなかったのだ。

ドッチボールはいったんやり出すと、単純だが、スリルのあるボール遊びだとわかった。いっしょうけんめいルールを書いたノートなど、すぐに必要なくなった。ぼくはドッチボールがだいすきになった。

ドッジボール大会なんて、兄ちゃんはまったく気が乗らないのではないか。去年は自分のことで頭がいっぱいだった。だから兄ちゃんのことなど、気にもとめていなかった。今年はちがう。すごく気になった。

四年二組男子チームのコートは、校庭のはしっこにあった。ぼくは兄ちゃんに気づかれないように、コートに近づいた。まわりには何人か、応援する人たちがいた。ぼくは何食

わぬ顔をして、その中にまざりこんだ。

ボールが、敵の内野から外野に、行ったり来たりしている。そのたびに、四年二組の内野に残っている者たちは、無言で逃げまどつている。さつきから誰も、ボールをキャッチしようとしなかった。

逃げていている者の中に、いた。兄ちゃんがいた。その中でも、ひときわ走るのがおそいのですぐにわかった。試合はボールのパスまわしをしているだけのような、単調な展開になった。

「いつまでちんたら逃げてんだよ！」

敵の外野がとうとう怒り出し、顔と頭スレスレにボールをなげてきた。内野からの攻撃も、白線ギリギリになげて来るようになり、次々に逃げ専門組はボールに当たった。

そしてついに、四年二組の内野に残っているのは、兄ちゃん一人となった。

「おら、たつき、いい加減、ボール取れよ！行くぞ！」

味方の外野から、ゆるめのボールが飛んできた。たった一人になった兄ちゃんは、こまっただようにうす笑いを浮かべて、ただ立っているだけである。胸で受け止めるどころか、手すら出さない。キャッチされなかったボールは、あっさり敵の外野に取られた。

「こうなったら、はさみ撃ちだ！」

敵の外野と内野から、兄ちゃんはまるで殺虫剤をかけられる害虫のように、何度となくねらい撃ちされた。よくよく見ると、敵の内野と外野、味方の外野の中に、この間、うちに遊びに来た三人の顔があった。

ボールが兄ちゃんのおしりに当たり、地面にてんととバウンドしてころがって行った。これで四年二組男子チームの負けは決まった。

やはり一人で見に来たのは正解だった。もし友だちがいたら、とてもあの最後の一人が、自分の兄ちゃんとは言えなかった。いや、こうなることは、なんとなくわかっていた。だから一人で見に来たのだ。ただ試合を見てい

るだけだったのに、顔から火が出る思いがした。なさけない。もうあのぶざまな人を、自分の兄とは思いたくない。

「ゆうき」

空耳かもしれない。誰かがそう呼んだ気がした。ぼくは逃げるように、四年二組のコートからはなれた。

「ただいまあ」

「ああ、ゆうき、やっと帰って来たのね」

お母さんはぼくが帰ってきたのを待っていたかのように、手早く身じたくを始めた。

「あれっ、何、どっか行くの？」

まだランドセルを置いてもないぼくに、お母さんは早口で、さやかな紙オムツが置いてある場所を教えてきた。

「ミルクはさつき飲ませたばかりだから、だ  
いじょうぶだよ」

「だからどこ行くの？」

ただの買い物なら、ぼくはともかくとして、

さやかを連れて行くことが多かったので、ちよつと気になった。

「区役所だよ」

「く、区役所？」

「来年の春には職場復帰するつもりだから、いろいろな手続きや、申しこみをしなくちゃいけないの」

ああ、そうか、お母さん、また仕事を始めるんだっけ。

このところ、家にお母さんがいるのが当たり前前のようになっていたから、不意打ちを食らったようなとまどいをおぼえた。

「もうすぐたつきが帰って来るとは思うけど、それまでさやかのことたのむね」

時間があまりないのだろう。お母さんは言うだけ言うと、ぼくの都合も聞かず、さっさと出かけて行った。

今日はこの後、公園で友だちとドッチボールをするつもりだった。すっかり約束をしたわけではないから、ぼくが行かなくても誰も

気にもとめないだろう。なんだかくやしい。さみしくて、つまらない。赤ちゃんの妹と二人でおるすばんなんて、ものすごく損をしたような気がする。

兄ちゃんはこのところ、帰りがおそい。どうやら学校からの帰り、毎日のように図書館に寄っているようだ。ぼくは気づいていたが、知らん顔していた。というか、あのドッジボール大会以降、ほとんどまともに、兄ちゃんと口をきいていなかった。

そんなぼくの態度に、兄ちゃんが気づいているのかいないのか、正直言ってよくわからない。あいかわらずのんきな口調で、平気でしょーもないことについて話しかけてくる。人の顔色もうかがってこない。そばでドッチボールの試合を見ていただけのぼくが、あんなにはずかしい思いをしたのに、兄ちゃんはずっと平気そうである。

例の三人組の前では、何も言えず、あらがうこともできないままのようだ。それなのに

家族の前では、何も問題ないという顔をしている。兄ちゃんという人が、ぼくにはなぞだった。

「あれっ、さやかか？」

そんなことをつらつら考えていたぼくは、急に我に返った。さっきまでぼくのまわりを、あぶなっかしい足取りでウロチヨロしていたさやかの姿が見えない。

つたい歩きができるようになったさやかは、このところ行動範囲がぐっと広がっていた。もしやと思い、トイレや風呂場にかけこんだがない。どこだ、どこに行った。

「ウンギヤアー」

まさか外に出て行ったのかとあせりだしたところで、キッチンから火がついたような鳴き声が聞こえてきた。

「どうした、さやか！」

ガスコンロの下で、さやかが手足をばたつかせて転がっていた。コンロの上にはやかんが置いてあった。とっさにそのやかんの表面

に触れて見ると、まだ熱かった。

グーの形でにぎられていたさやかの手を、あわてて広げてみた。小さなもみじのような手のひらは、真っ赤である。どうしよう。さやかがやけどした。ぼくの頭の中は、真っ白になった。

「ただいまあ、あれ、お母さんは」

この時こそ、兄ちゃんののんきな声に、救われたと思ったことはない。

「兄ちゃん、さやかが、手が、やかんにさわって」

兄ちゃんはぼくのつたない説明でも、すぐに緊急事態が発生したことをさとったようだ。泣きさけぶさやかをだきあげ、水道のコックを横にまわすと、赤くなった手に水をジャージャー流した。

「今から病院に連れて行くから、ゆうきはお母さんの携帯に電話して」

「うん、わかった。兄ちゃん、オレ、どうしよう」

ぼくはもう半泣きになっていた。

「心配すんな」

「でも、さやか、女の子だし」

「たぶん、この程度なら、跡は残らないよ」

それはあくまでも、兄ちゃんの見立てだろう。ぼくの気持ちを軽くするために、兄ちゃんがわざと、気安くそう言ってくれているのはわかる。でも、かえってそのやさしさが、今のぼくにはきつい。

さやかはぼくの妹であり、お父さんとお母さんにとっては、待ちに待った娘でもある。ぼくは知っている。お父さんは、さやかが生まれた日からずっと、ほぼ毎日のように、写真と動画をとっていることを。

兄ちゃんも、赤ちゃんの頃から、写真の枚数は多いが、さやかにはとうていかなわない。お母さんだって、さやかがお腹の中にいる時から、女の子だとわかると、ウキウキと鼻歌を口ずさみながら、ピンクや赤のベビー服を買いそろえていた。

真ん中のぼくなんて、二人とくらべると、写真も動画もきよくたんに数が少ない。あつたとしても、どちらにもかならず、兄ちゃんか、最近ではさやかがよくうつりこんでいた。そんな我が家のお姫様の存在の妹を、ぼくはやけどさせてしまったのだ。

「すぐに帰って来られると思うから、ゆうきは家にいな」

いっしよに病院に行くというぼくに、兄ちゃんにはふりはらうようにそう言うてきた。

なぜ、ぼくを連れて行ってくれない。やはり兄ちゃんには、ぼくのここのところのよそよそしい態度に気づいていたのだ。だからここぞとばかりに、つつぱねてきたのだろう。

妹の身に大変なことが起こったというのに、ぼくはまだ、にいちやんをうらんでいた。

「大事にいたらなくてよかったよ」

ベビーベッドの中でねむっているさやかの片手には、ほうたいが巻かれている。お母さ

んは身を乗り出して、さやかはその手に、自分の手をかさねた。

ぼくからの電話を受けたお母さんは、区役所からすっ飛んで帰ってきた。ほぼ同じタイミングで、さやかをだいた兄ちゃんも、病院からもどってきた。

「やっぱ、この程度だったら、ぜんぜん跡には残らないってさ」

まず兄ちゃんはお母さんにそう言い、その後にはぼくの顔を見てきた。よかった。ぼくは全身の力がぬけていきそうになった。

「ごめんなさい、ぼくが」と口を開いたとたん、声がしゃくり上がり、後が続かない。すると、リレーのバトンをひきつぐように、兄ちゃんが説明し出した。

「お母さん、ぼくが悪いんだよ。家に帰って来てからすぐに、ゆうきをゲームにさそって、さやかのことをよく見てなかったから」

ぼくは耳をうたがった。そんなの、事実とはぜんぜんちがう話じゃないか。なぜぼくの

ことをかばうんだ。

ドッチボール大会以来、兄ちゃんのことをさけ、内心小ばかにもしてきた。あげくのはてさつきまでは、病院にいっしょに行けなかったことをうらんでもいた。そんなぼくに、どうして兄ちゃんは、恩を売ってこようとすめるのだ。

「ゆうき、たつきの言うことは本当なの？」

お母さんがさぐるような目つきで、ぼくを見てきた。うたがっているのだ。兄ちゃんに恩なんて着せられたくない。ぼくは最初から、正直に答えるつもりだった。

「いや、悪いのは・・・」

また声が引っくり返る。もしお父さんに、ありのままの事実を知られたら、どうなるのだろう。お父さんは兄ちゃんと性格がにている。物静かでおだやかな人である。かりに悪いのがぼくだとわかったとしても、決して大声で怒鳴ったりはしないだろう。

でもぼくの写真と動画の数が、ますます少

なくなるのはまちがいない。そう思うと、ぼくが悪いのに、なんだかさみしくなる。

「だから悪いのはオレだって」となおも、兄ちゃんがたたみかけてくる。

「もういいよ。今日は、二人がいてくれてよかった。元をただせば、最初からさやかを連れて行けばよかったのに、家に置いていったお母さんが一番悪いのよね」

お母さんにはすべてお見通しのようにだった。もうこれ以上、だれが悪いとか言い合ってもムダだとさとしたようだ。

「じゃあ夕飯のしたく、してくるね。二人とも、さやかが目を覚ますまで、ここで見てくれる？」

ぼくと兄ちゃんはだまっとうなずいた。部屋に取り残されたぼくらの間に、気まずい空気が流れた。ここで、かばってくれた兄ちゃんに、「ありがとう」と言うべきなのか。ぼくはどうしても素直になれない。だからそのままの気持ちを、兄ちゃんにぶつけた。

「何もゆうきに、恩を売るつもりなんかないよ。というか、なんかずっと、悪いなあって思ってたし」

「悪いって？」

「ちよつと前に、例の三人組が遊びに来た時、ゆうきが機転をきかせて、追い帰してくれたじゃん。それですごく助かったのに、この前のドツチボール大会では、ぜんぜんいいところ見せられなくて、兄としてなさけないというか、はずかしいというか、なんか、ごめんな」

兄ちゃんは全部わかっていた。へらへらしっているようで、のん気そうにしているようで、内心では苦しんでいたのだ。

「そんな、さっきの兄ちゃんはテキパキしてて、すごくたよりがいてあって、かつこよかったよ。オレ、見直したもん。でも何も、オレをかばうことなんてなかったのに、どうして？」

「たぶん、たまには兄として、かつこいいと

ころを見せたかったっていうのが正直なところ、かな」

兄ちゃんはやっと本音を言ってくれた。すると、ぼくの心の中で、かたくかたまっていた何かから、じわーっとした肉じるのような感情がしみ出てきた。ぼくは兄ちゃんのことを、何もわかっていなかった。

「マンマーマンマー」

いつの間にか、ベビーベッドの中のさやかが目をさましていた。両足をまげ、その先を手でつかもうとするのだが、ほうたいを巻いている方の手ではうまくつかめない。何度か足をばたつかせ、ようやくほうたいの手で、足先をさわった。さやかは一瞬、「あれっ？」という顔をして、「ウフオフオン」と満足げに笑った。

「なんか、おっさんみたいなお笑い方だな」

「ホントに。もう手、痛くないのかな」

「そのうち、ほうたいも、勝手に取っちゃいそうないきおいだ」

「でも、まあ、よかった、無事で」

「うん、このぶんなら、今日もいい日で終わ  
りそうだ」

「でも、やっぱ、お父さんには、オレの口か  
ら、本当のことを言いたい。オレだって、さ  
やかの兄ちゃんだもん」

そう、いつまでも、弟として、兄ちゃんに  
甘えているわけにはいかない。

「わかった。じゃあ、もうオレは、口をはさ  
まないようにする」

お父さんに正直に告白して、ぼくの今日を、  
いい日で終わらせたい。ぼくも兄ちゃんも、  
まだこの世に生を受けてから、そんなに長い  
月日を生きていない。それでもけっこう、イ  
ヤな思いや、くやしい思いをしてきた。

兄ちゃんなんて、ぼくより二年長く生きて  
いる。きっと今まで何十回と、心がおれそう  
になったことがあったはずだ。だからこそ、  
一日でも多く、今日はいい日という日を増や  
していきたいのだろう。

「ただいまあ」

玄関先から、お父さんの声が聞こえてきた。

その声だけでは、お父さんのきげんがいいかどうかはわからない。

「おかえりなさい！」

ぼくはいどむように、真っ先にお父さんを出むかえに行った。